

## 宋代巫覡に関する研究の問題点と可能性

王 燕 萍

### はじめに

「巫覡」という言葉から何を連想するだろうか。現代日本においては、「巫女」というのは神社に属し、神楽を舞い、神事に奉仕して神職を補佐する女性である。それに対して、現代中国においては、神婆と呼ばれる巫覡は社会の隅々に散在しているが、知識人に軽視されるのが通常である。たとえ一般人には軽視されなくとも人前では言いにくい存在となっている。

ところで、このような現代中国の社会の周縁に位置する周辺人は盛衰を繰り返しながら中国社会に一貫して存在しており、中国伝統文化の重要な一要素だと言えることができる。古代中国には、巫覡信仰が道教・仏教・儒教<sup>1)</sup>より以前に形成され、幅広く古人に信奉されており、人々の思想信仰の基盤を形作っていた。実際に、「巫史伝統」という学説が提出されている。この学説によれば、伝統的巫史文化は儒教・道教によって改変されながらも、中国古代文化の中核として続いている<sup>2)</sup>。漢代以降、巫覡は儒教が主導している官僚制度から排除されたが、人々の巫覡に対する信仰は止むことがなかった。巫覡信仰はずっと人々の心の奥底に根付いており、人々の日常生活に影響し続けている。

それゆえ、中国の信仰文化への理解においても、民衆の日常生活への理解においても、巫覡信仰を真剣に考察する必要があると思われる。実際、二十世紀後半から巫覡信仰に関する研究成果が絶え間なく出されている。台湾の曾双秀は「中国伝統巫者研究之回顧与展望：以歴史学界为核心」<sup>3)</sup>において、欧米・中国歴史学界の巫覡信仰に対する研究成果を整理している。ここにその詳細を紹介することはしないが、概していえば、これまでの研究は対象とした時代を問わず、巫覡の定義と機能・形象と活動空間・巫医関係という問題点に集中している。また、巫覡信仰の歴史的発展の研究史において、宋代は重要性を有していたことが分かる。

宋代において、漢代から設置され続けている「太卜署」

という官署は廃止され、巫覡信仰は官僚制度から完全に排除されてしまった。それを転換点として、民間に埋没した巫覡信仰は反って人々の日常生活にさらに浸透していった。それは前代の唐代より盛んであり、明清以降の沈滞し衰微した状況と比べても違っている。

では、画期となる宋代においては、巫覡信仰の実態は如何なるものであったのか。巫覡信仰はどのような社会背景のもとで、如何なる変化が生じていったのか。巫覡信仰はどのような形で人々の日常生活に浸透していったのか。巫覡信仰は宋代人の信仰体系の中にどのように位置付けられるのか。筆者はこういった問題に関心を持っており、以下の章においてこれまでの宋代巫覡信仰に関する研究史を整理することとする。

### 1. 宋代巫覡信仰に関する研究の回顧

宋代巫覡研究を先導した研究者は中村治兵衛である。氏の論文集『中国シャーマニズムの研究』<sup>4)</sup>中に収められた宋代に関する部分「第四章 北宋朝と巫」と「第五章 宋代の巫の特徴—入巫過程の究明を含めて—」は宋代巫覡研究のほぼ全ての問題点に触れている。中村氏はまず「太古以来王朝とともに終始してくる巫は、宋代に民間在野の存在になり下るといふ大きな変化をうけた」<sup>5)</sup>という見解を出している。次いで五代後周の巫に対する弾圧を受け継いでいた北宋が地方において行った巫覡の取締り活動を描いている。そして、太祖・太宗・真宗朝、仁宗朝、英宗・神宗・哲宗朝及び徽宗朝という四つの時期にも巫はなお各地の社・祠廟に仕えて活動していたこと、また科挙のもとで儒学を学んだ地方官は絶えず禁巫活動と医薬の普及の政策を展開したことを宋代人の詩文から明らかにしている。最後に、仁宗朝前後に、巫覡の禁絶と並んで京東路・夔州路・広南東路・成都府路の各地に淫祠を廃する事例が頻出したことを指摘している<sup>6)</sup>。次に中村氏は「宋代の巫の特徴—入巫過程の究明を含めて—」の章において、南宋に入っても、地方官の巫覡を

退ける活動が続けられていたことを明らかにしている。唐代の巫覡とともに宋代の巫覡は社・祠廟・叢祠に寄託して活動していたこと、里巫・村巫・師巫などが県城・州城という都市部と里・村といわれる農村部に広く散在していたことを解明しているほか、宋代の巫の名称と作法、及び入巫過程を紹介している<sup>7)</sup>。

その後、1996年に、国立台湾師範大学歴史系の劉佳玲は「宋代巫覡信仰研究」と題する修士論文を提出した。劉佳玲は中村治兵衛と林富士<sup>8)</sup>の研究成果を踏まえて、宋代巫覡に関する基本的問題点、例えば入巫過程・存在形態、巫覡の鬼神との交通・卜占と予言・医療と除魅・祈雨・呪いなどの仕事、及び巫術の種類とその施行場所・工具を整理している。そのほか、論文の終章として、巫覡信仰と社会政治との相互依存と衝突を、宋代の生活行事との関わり、政府の宗教政策と巫に対する態度、地方官の取締り活動などの方面において論じている。

2004年に出版された『宋代民間巫術研究』<sup>9)</sup>は劉黎明がアナル学派の影響のもとで、宋代民間の社会生活の実態を究明しようとして出した研究成果である。劉氏はまず呼称・来源・社会的地位・神霊との交通方法と工具・呪詛と符籙及び巫術の類型を検討している。次に民間巫術と宋代の社会・政治・文化との関連性について、劉氏は次のような点を明らかにしている。第一に、巫覡信仰の分布には南北の差があったが、地域社会の間に巫術が伝播していた。自然の劣悪な環境が起因して、巫覡信仰は南方地域に、より発達していた。「南法」と呼ばれる嶺南の巫術は人間の流動、たとえば商人の移動によって、隣接の地域へ広がっていった。第二に、朝廷が民間巫術を取り締まろうとしていた理由は、民間巫術が政治権力に関与していたことにある。具体的に言えば、巫覡は民間暴動を挑発し、社会治安を妨害した。そこで、朝廷は政権維持のために、巫覡が握っていた神霊に交通する力や世俗社会をコントロールする力を手に入れようとした。朝廷は禁巫活動を行う一方、皇帝と官僚たちは個人的に巫覡と交際することもあった。第三に、劉氏は初めて民間巫術と道教・仏教の間に双方向的な浸透があったことに言及している。例えば、道士はしばしば巫覡の職事を担当することがあった。また、民間巫術と道教・仏教の呪い・符籙には切っても切れない関係が存在した。さらに、地方官が仏教を利用して巫覡を退けるということもあった。最後に、巫術が宋代社会生活の各方面に関与していたことについて宋人の詩文・年中行事・人の通過儀礼から裏付けている。

『在国家与社会之間—宋代巫覡信仰研究』<sup>10)</sup>は香港の研究者王章偉がもたらした優れた研究成果である。王氏は現代の民間信仰に関する様々な研究と欧米の市民社会に関する理論を参考にした上で、巫覡の通神技術・社と祭祀の場所・巫術の継承と伝播・国家の宗教政策・民衆

の治療への求めなどの様々な視角から宋代の国家と社会の関係を分析している。研究対象とする巫覡に対する認識について、王氏は宋代の文集を分析し、巫覡に対する宋代人の認識は先秦以降と同じであったと指摘している。さらに王氏は活動場所・施術法器と儀式から宋代人の巫覡イメージを描いている。加えて、王氏は巫覡信仰の流行実態を「地域空間」と「社会空間」に分けて考察している。具体的に言えば、「地域空間」、すなわち地理的分布にあたって、北宋ではほぼ全国の三分の二の地域で巫覡信仰が盛んであったこと、北方より南方において流行していたこと、及び南宋では巫覡を信奉することが全国的な風俗となっていたという事実を明らかにしている。巫覡信仰の「社会空間」というのは、巫覡信仰は民衆にとどまらず、「父老」・士大夫などの各階層に及んでいたといった、浸透している階層・身分などを含み込んだ空間を指すものである。そして王氏は「信巫不信医」、すなわち医者より巫覡の方を信じている、という民衆の医療観についてのエリートの議論を通して、エリートと民衆の巫覡観念の差異を解明している。巫覡信仰の流行の要因については、宋代人の鬼信仰・巫覡の技芸・地域的文化的背景・巫覡の伝承方式などの観点から検討している。最後に、淫祠の廃棄と禁巫活動から国家が民衆の巫覡信仰を改善しようという考え方、およびその具体的な実践を解明している。この論著は現代人の巫覡信仰への偏見を捨て、宋代人の心の世界に立ち戻って、国家と社会の間の「第三領域」<sup>11)</sup>に介入してくる巫覡信仰を全面的に深く考察していた研究成果として位置づけられる。

王氏の研究成果の三年後、方燕は『巫文化視域下的宋代女性』<sup>12)</sup>という巫覡信仰文化のもとの婚育・身体・疾病に関する宋代女性の社会生活を検討する本を出版した。従来、宋代女性史研究は婚姻制度・貞節観念・再婚・財産分割・生育と性・社会地位などの問題を焦点とする傾向が強い。方燕は近年ジェンダー研究の新たな動向、すなわちジェンダー意識・文化的身体・宗教信仰等の観点から宋代女性と巫覡信仰文化上の繋がりに目を向けている。彼女はまず宋代における女性生活の中に存在していた巫覡信仰の要素、女巫の存在状況及び女性の巫覡への拒絶行為を通して、巫覡信仰が流行していたという背景下での女性生活を概観している。続いて医書を主な史料とし、宋代女性にとって最も重要な婚姻・生育という人生経歴の中での巫術の姿を明らかにしている。最後に、宋代人は女性身体をどう考えていたのか、女性身体はどのように使用されたのか、女性疾病はどのように治されたのかという問題を巫術文化面において検討している。方燕の巫術・巫文化に対しての定義にはいささか疑問を感じるが、巫文化から宋代女性生活を見ろという視点及び民衆の巫覡への拒絶行為に着目する視点は示唆的である。

最近の研究としては李小紅が執筆した『宋代社会中的巫覡研究』<sup>13)</sup>がある。その中で、李氏は戦国から隋唐にわたっての巫覡の発展過程を明らかにした上で、入巫方式・生存方式・社会地位・職事と手段などの面から宋代巫覡のあり方を解明している。さらに巫覡の地理的分布、各階層における活動、僧侶道士と比べた際の社会的、法的地位・身分、巫覡の医療行為、反乱との関わりなどを論じ、最後に政府の禁巫活動を考察している。李氏は宋代に至って巫覡信仰が衰微するようになったこと、及び巫覡が宋代社会にネガティブな影響を与えていたことを強く指摘している。

概していえば、近年宋代巫覡信仰に関する研究は着手され始めたばかりで、これまでの研究の主な論点は巫覡自体の姿（呼称・入巫過程・巫術・存在場所・機能など）・宋代人の巫覡観・国家と地方官の禁巫活動・巫医関係などである。これらの研究によって宋代における巫覡信仰のおおよその姿は明らかにされた。禁巫活動を焦点にするのは他の時期の巫覡研究と比べて特徴的な点であるが、宋代巫覡信仰研究はほぼ漢代・明代巫覡研究と同様な枠組みにとどまっている。果たして、他の時代と同様な枠組みにとどまるのは妥当であろうか。次の章では今後の研究の可能性について述べることにする。

## 2. これからの可能性

以下、先行研究について幾つかの感想を述べながら、今後の宋代巫覡信仰研究の可能性を提示する。

### (1) 巫覡・巫覡信仰への認識

対象とされる巫覡は如何に捉えるべきだろうか。これはまず初めに明らかにしなければならない点といえるだろう。これまでの研究では、人類学のシャーマニズム概念を借りる、先秦からの巫覡のイメージをそのまま宋代に援用する、文献上に現れる「巫」の呼称からイメージを導き出す、といったケースが多い。王章偉はその時代に生きていた宋代人自身の認識をつかむべきと提唱しているが、宋代人の文集のテキストを分析した結果、巫覡に対する認識は宋代人が先秦以降と同じであったと指摘している<sup>14)</sup>。確かに文献資料上の「巫覡」は表面的にその姿には大きな変化がないかもしれないが、その中身が先秦から変わっていないという点には疑問がある。更には、宋代文人によって書かれた巫覡は文人たちによって作られたネガティブなイメージがどうしてもつきまとう。我々は如何に宋代文人たちによって作られた枠を乗り越えて宋代人の潜在意識に残っている巫覡観を客観的に認識することができるのであろうか。

可能性の一つとしては宋代人の作品中の巫覡観である。

宋代に編纂された『太平広記』<sup>15)</sup>・『夢溪筆談』<sup>16)</sup>・『夷堅志』<sup>17)</sup>などの作品の中に、巫覡に関する神異物語が収められている。編纂者の意図を考慮に入れ、作品の枠組みにその神異物語がどのように位置づけられているのか、叙述の中にどのような言葉がつかわれているのかという観点から編纂者自身が無意識的に表出する巫覡観念を把握することができるだろう。

もう一つは宋代の制度の中に表出する巫覡の位置付けである。ここで言いたいのは官僚制度の中の巫覡の位置ではなく、宗教制度・財政制度・司法制度の中の巫覡の姿である。南宋の時、荆湖北路は財政困難のために一時的に「師巫錢」を徴収したことがあり、また広南東西路も一時的に僧侶の「度牒」のような「師巫帖」を発行したことがある<sup>18)</sup>。一般に巫覡は「雑戸」に入っていたと言われる。問題となるのは、司法案件中、巫覡にかかわったら案件がどう解決されたのか、僧侶・道士と比べて判決の特徴はどこにあったのかなどである。例えば、貴重な南宋法制史料である『名公書判清明集』のうち、幾つかの淫祠・巫覡に関する判語が残されている。他の南宋の文集に収められている判語と併せて分析することにより、新たなイメージを抽出できる可能性がある。

最後は巫覡の身分意識、すなわちアイデンティティーの問題である。儒学を身につけた士人の立場にしても、国家制度の側面にしても、他者の視角にとどまるだろう。宋代の巫覡は一体自分のことをどう考えていたのか。巫覡という身分はかれらにとって何の意味を持っていたのか。官方巫覡と民間巫覡の区別があったのか。こうした問題についても深く考察する必要がある。

### (2) 長期的視野と動態的視角

宋代が巫覡信仰発展史の中に果たした役割の研究成果を見る限り、断代史的な観点、すなわち宋代のみを考察するケースが多い。しかしながら、巫覡信仰の変化はより長期的な視野が必要となってくるであろう。宋代の「太卜署」は廃止される前に、どのような役割を果たしていたのか、もしそれ以前に太卜署がすでに形式化されていたのであれば、所謂太卜署の廃止という転折点の意味はどう捉えればよいだろうか。それは恐らく隋唐五代まで遡らなければならない。また、前述の通り、巫医関係という問題については、陳秀芬によって明代にも「祝由」という儀式的な医療方法が医学に取り入れられていたことが指摘されている<sup>19)</sup>。「祝由」という方法は、漢代から受け継いでいたやり方であったのだろうか。こうした問題は数多く残されており、長期的な視点が必要となってくる。

次に両宋間における巫覡信仰の変化に目を向ける必要がある。これまでの研究は宋代巫覡信仰の全体像を変えないものとして設定している傾向が強いが、巫覡信仰

は政治の変動と合わせて「変化」し続けていた。実際、祠廟と緊密に関連していた巫覡は北宋の淫祠に対する整理活動と連動する形で同時に禁じられた。南宋に入ると、祠廟政策の調整によって、国家に認められている祠神は増加していった。こうした状況において、次のような設問をたてることも可能である。宋一代において巫覡の状況は変わってきたであろうか。加えて、巫覡信仰は北宋から南宋への変換期に、どのように展開したであろうか。こうした問題は、宋代の政治・社会の状況を視野に入れて考察しなければならない。要するに、「変化」の視点に立って、宋代の内外の巫覡信仰を探求する必要があるだろう。

### (3) 巫覡信仰の地域性と地域文化

宋代における巫覡信仰はほぼ全国的に信奉されていたが、南方の方が巫覡信仰の雰囲気の方が濃厚であったと言われている。言い換えれば、巫覡信仰にとって地域的な格差が見られる。宋代における地域社会は、文化はもちろん、行政・財政・法制においても一定の自律性を持っていた。従って、特定の地域文化において巫覡信仰の実態を究明するのは可能であるだろう。

例として福建地域の事例を見てみよう。林拓が提示しているように、福建地域には「閩文化」と呼ばれる独自の文化が存在している。福建地域は先秦時代の「閩越文化」を土台とし、漢代から三つの周期によって今の独特な文化を形成してきたが、唐代中期～両宋期は第二周期に当たり、国家に認められている宗教信仰が主導的な地位を占有し始めた。また、福建内部にも沿海部・閩北部・閩西部の差異が存在している<sup>20)</sup>。林氏の視野に入っているのは福建文化の形成の過程であり、宋代における巫覡信仰に対する着目が不十分である。何れの地域においても同様な研究の可能性はあるが、巫覡信仰が南に特に広がっていたこと、文献資料、石刻資料残存の多さという状況からして、たとえば福建地域を取り上げて、「閩文化」の土台と看做される巫覡信仰が地域的な文化に果たした役割及び社会生活との関連性を検討する可能性があると考えられる。

### (4) 言説としての巫覡物語と宋代民衆の日常生活

中国史研究は、1980年代及び90年代にフランスのアナール学派から影響を受け、新しい文化史の研究方法が模索されるようになった<sup>21)</sup>。伝統的な歴史学においては、日常生活とは衣食住や普段の決まりきった生活や仕事、恒常性・反復性・習慣性という意味での私的な小さな世界と捉えている。ところで、自分自身の日常を振り返ってみればわかるように、日常生活といっても、絶対的に平板なものではない。退屈な日常から離脱する娯楽や平穏な生活を攪乱する病気や事件などは、非日常的な

性格が強いが、こういった娯楽や病気なども日常生活の構成要素の一つとというものである。宋代民衆にとって、病気になるとき、気候不順になるとき、不幸な事件に遭うとき、巫覡に助けを求める習慣があった。だからこそ、巫覡と民衆の連結という視角から起伏のある民衆の日常生活を伺うことができるだろう。

新しい文化史構築を目指す研究者は、研究方法として、事実ではなく言説を歴史理解の基盤に置く。即ち、史料に載っている記事は疑いがない事実ではない。我々ができうるのはその記事を記した著者の意図、あるいはその記事の作成過程を解明し、その背後に隠れている、知られていない文化意識や宋代民衆生活の裏面を探ることである。

例えば、地方官や士大夫は巫覡を批判する文章を書いているが、そこから彼らの潜在的意識が見えるかもしれない。彼らは社会における新しい変化に対してどのように気づき、憂慮していたのであろうか。たとえば南宋の政治家・思想家・文人としても知られる洪邁は『夷堅志』の中に様々な怪異な物語を収録している。これまで多くの研究者は、これらの物語は当時の社会現象や人々の意識を表していると考え、唐宋間、あるいは北宋・南宋間の変化を読み取ろうとしてきた<sup>22)</sup>。従って、巫覡の物語においても宋代社会生活を捉えることは可能であると考えられる。

### (5) 信仰体系全般への視座

劉黎明が指摘してきたように、巫覡信仰は独立的な存在ではなく、道教・仏教に繋がっている<sup>23)</sup>。実際、巫覡は祠廟に身を寄せ、また無名な巫女が信奉されて祠廟の神となるなど<sup>24)</sup>、祠廟信仰と関わっている。儒教も巫覡信仰から発達したという指摘もある。儒教・道教・仏教・祠廟信仰・巫覡信仰という、有機的連関を有する宋代人の信仰体系は人々の日常生活に影響を与えている。民間では宗教の間の区別は薄くなり、人々は同時に道仏巫の方法を通して生活上の困難・矛盾を解決する機会が多い<sup>25)</sup>。それゆえ、巫覡信仰を考察するときには、儒教・道教・仏教・祠廟信仰といった連関性を有する信仰体系を考慮に入れて、巫覡信仰のあり方を解明すべきと思われる。

こういった信仰体系から、宋代人の日常生活をどう解明できるであろうか。アプローチのひとつとして考えられるのは信仰生活空間である。王章偉・李小紅等学者は巫覡の分布の地理的空間、または巫覡が浸透している社会階層という社会空間を論じているが、それは地域性を考慮することなく、全国のレベルで、さらに巫覡のみを対象とした考察であった。仮にある地域をとりあげて、その域内の巫道仏儒それぞれの施設(祠廟・道観・仏寺・社稷壇・先賢祠など)を中核とした信仰空間、人々の日

常生活空間を併せて分析するとすれば、如何なる生活風景が見えてくるであろうか。一般的に言えば、祠廟・仏寺などの信仰施設は同時に教化・娯楽・市場としての機能を有することが多い。更に、金井徳幸が提示しているように、例えば社稷壇は州の段階までしか設置されていなかったというように、国家・州・県・村の各レベルでの信仰施設の配置には格差があった。村の段階で村民の生活空間に最も介入していたのは巫覡であった<sup>26)</sup>。明清祠廟の研究成果においては、州・県・郷などを異にする廟界という信仰空間の境界が存在していたことが明らかにされている<sup>27)</sup>。これらの視点を参考にして、地域内の州県村の信仰空間の相違、各信仰それぞれの空間の境界及び民衆日常生活に果たした役割を考察することも重要な課題であると考えられる。

本稿ではこれまでの宋代巫覡信仰に関する研究を振り返ってそれぞれの問題点を整理しつつ、今後の更なる課題と可能性を検討してきた。従来の問題関心は巫覡自体の姿・宋代人の巫覡観・禁巫活動・巫医関係にあった。それらによって宋代巫覡信仰の概観は明らかにされてきたが、巫覡それ自身の認識・社会的或いは法的地位・身分などの問題といった別の視角から史料を再考する必要がある。さらに、巫覡信仰を地域社会または信仰体系全般において考察を行うべきであると考えている。

## 注

1. 本稿では「儒教」という言葉を使っているが、儒学は宗教と看做されるかどうかという問題について学界では定論がまだない。
2. 李沢厚「説巫史伝統」、氏著『己卯五説』、中国電影出版社、1999年。その他に、呉文章は夏商周三代の巫師伝統が先秦から漢代にかけて儒者に改変され、儒家の「深層的構造」となっているというプロセスを明らかにしている（氏著『巫師伝統和儒家的深層結構』、復文図書出版社、2001年）。
3. 曾双秀「中国伝統巫者研究之回顧与展望：以歴史学界为核心」、『漢学研究通訊』32：1（総125期）、2013年2月。
4. 中村治兵衛『中国シャーマニズム研究』、刀水書房、1992年。
5. 中村治兵衛『中国シャーマニズム研究』第四章「北宋朝と巫」。
6. 中村治兵衛『中国シャーマニズム研究』第四章「北宋朝と巫」。
7. 中村治兵衛『中国シャーマニズム研究』第五章「宋代の巫の特徴—入巫過程の究明を含めて—」。
8. 林富士『漢代的巫者』、稲郷出版社、2004年再版；林富士「中国古代巫覡的社会形象与社会地位」、林富士主編『中国史新論（宗教史分冊）』、聯経出版公司、2011年。
9. 劉黎明『宋代民間巫術研究』、巴蜀書社、2004年。
10. 王章偉『在国家与社会之間—宋代巫覡信仰研究』、中華書局、2005年。
11. 第三領域というのは黄宗智が提出している中国の国家と社会の間にある「公共領域」「市民社会」である。結論の部分に、王章偉は巫覡信仰が地方民間に重要な役割を果たしており、巫覡信仰を国家権力と地方エリート以外の「第三領域」と看做しうる可能性を提示している（参照黄宗智「中国的『公共領域』与『市民社会』—国家与社会間第三領域」、鄧正来・J. Alexander 編『国

- 家与市民社会—一種社会理論的研究路径』、上海人民出版社、2006年）。
12. 方燕『巫文化視域下的宋代女性』、中華書局、2008年。
  13. 李小紅『宋代社会中的巫覡研究』、光明日報出版社、2012年。
  14. 『在国家与社会之間—宋代巫覡信仰研究』第二章第三節「中国伝統対巫の認識」。
  15. 劉静貞は編者の分類という視角から、『太平広記・婦人部』には、編者が新知識体系を打ち立てようという態度及びその社会文化的雰囲気が存在していたことを解明している（『宋代における社会文化的雰囲気を捉えて—『太平広記・婦人部』の編集を中心に—、『人文研究』第61巻、2010年3月）。その方法を参考し、『太平広記』に収められている巫覡に関する記事がどのように編者の理念によって分類され、位置付けられるかという側面から宋代初期の知識人の巫覡観が伺えるだろう。
  16. 『夢溪筆談』は北宋元祐年間成立した随筆集である。有名な自然科学者である沈括はその随筆集の中に、「神奇」「異事」の中で巫覡信仰に言及している。自然科学者としての著者が巫覡をどのように取り扱っているかという問題は興味深い。
  17. 『夷堅志』は南宋洪邁が直接・間接的に見聞した怪異記事などを取りまとめ、書き記したものである。信憑性の問題を指摘する研究者もいるが、これまで社会史・文化史の重要な史料として利用されてきている。
  18. 宋・王炎『双溪類稿』卷二〇：「上劉岳州」：僧寺師巫、月納餉錢五也。『宋会要輯稿』刑法二之一二〇：【淳熙七年】十月二十四日、臣僚言：廣南諸郡創鬻沙彌師巫二帖、以滋財用。緣此鄉民怠惰者爲僧、奸猾者則因是爲妖術、除出給沙彌文帖已立限收毀外、詔廣東西路帥司行下所部州軍將給過師巫文帖、并傳習妖教文書、委官限一月根刷拘收毀抹、嚴行禁止、毋致違犯。
  19. 陳秀芬「当病人見到鬼：試論明清医者對於『邪崇』的態度」、『政治大學歷史學報』30、2008年。
  20. 林拓『文化的地理過程分析：福建文化的地域性考察』、上海書店出版社、2004年。
  21. 竹岡敬温『アノール学派と社会史—「新しい歴史へ向かって」』、同文館、1990年；竹岡敬温・川北稔編『社会史への道』、有斐閣、1995年；リン・ハント編、筒井清忠訳『文化の新しい歴史学』、岩波書店、2000年。
  22. 例えば、大沢正昭は『太平広記』・『夷堅志』を史料とし、「僕」「答」という言葉の使い方から家族及び擬制的家族内部の人間関係の変質を解明している（「答・僕・家族関係—『太平広記』・『夷堅志』に見る唐宋変革期の人間関係—」、中国史研究会編『中国専制国家と社会統一—中国史像の再構成 II』、文理閣、1990年）。このように、『夷堅志』の中に表出する巫覡物語の言葉遣いを通して、地域社会の内実を探ることも可能であると思われる。
  23. 劉黎明『宋代巫術研究』第七章。
  24. 李小紅は今幅広く信奉される媽祖が巫女から祠廟神となってくことを論じている（『宋代社会中的巫覡研究』第八章「個案研究：巫女媽祖及其信仰在宋代的嬗變」）。
  25. 廖咸恵によれば、宋代エリートは公的な生活において仏教・道教のみを利用する傾向が強いのに対し、私的な空間には巫を頼みとする場合も少なくなかった（「悪霊との遭遇—宋代エリートの生活に見える霊と悪鬼の力—」、『大阪市立大学東洋史論叢（文献資料学の新たな可能性②）』、2007年）。エリートには公私の区別があったかもしれないが、民衆にとってはどうであっただろうか。
  26. 金井徳幸「南宋における社稷壇と社廟について—鬼の信仰を中心として—」、酒井忠夫編『台湾の宗教と中国文化』、風響社、1992年。
  27. 王健『利害相関：明清以来江南蘇松地区民間信仰研究』第二章「廟界：民間信仰的空間展開」（上海人民出版社、2010年）参照。